第５章　考察

第１節　古墳時代前期の住居跡

今回の神明遺跡第５次調査の発掘調査の結果、縄文時代から中世までのいくつかの遺構が検出された。第１節では検出された遺構のうち、検出状況の良好な12号住居跡について、住居構造や出土遺物の性格・時期について考察していきたい。

12号住居跡の上屋構造と埋没過程の時間幅について

12号住居跡の立地、規模、内部構造についてはp17～23の報告文と図を参照していただきたい。ここでは12号住居跡が焼失住居であることから、焼土や炭化物を含めた覆土堆積状況と遺物出土状況より、住居の火災状況の把握と上屋構造の復元を行い、本住居の使用時から埋没完了までの時間幅について考えていきたい。

12号住居跡の堆積層の分類は、①住居の最終生活面より古い貯蔵穴２の堆積層を最も古い層とし、②最終的な生活面の堆積層、③住居使用終了時から火災までの堆積層、④火災時の堆積層、⑤火災以降の堆積層となる（第１表）。①は貼り床の下から検出されたため、最も古い堆積層として捉えた。②は最終的な生活面を判断するものであり、③は使用終了から火災までの時間幅を示す手掛りとなる。④は火災の状況と上屋構造の復元を可能とし、⑤は火災後の住居跡地の二次的使用の有無を知ることができる。

No	堆積層分類名	対応層
①	住居最終使用時以前の堆積層	貯蔵穴２－黒褐色土
②	住居最終使用時の堆積層	貼り床－住11～13層、炉－住８層・炉１～２層・焼土１～２層
③	住居使用終了時から住居火災直前までの堆積層	壁溝－住９～10層、貯蔵穴１－貯４・５層
④	住居火災時の堆積層	上屋構造－焼土１層・住３～７層 貯蔵穴１－貯４層・焼土層、貼り床－焼土２層
⑤	住居火災以後の堆積層	遺構外からの流入土－住１～３・７層 貯蔵穴１－１～３層

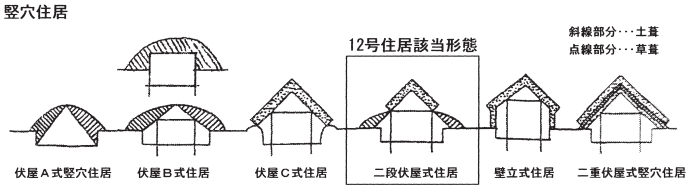
※本調査では、住３・７層は火災以前、以後のどちらの堆積にも分け難いため、④・⑤の両方に属することにする。
※焼土２は、火災時に貼り床が被熱したため発生したので、④に入れた。

第１表 堆積層分類表

堆積層の特徴としては、②に位置する貼り床層の上面が被熱しており火災の影響を直に受け、特に住居中央に著しく見られること、③の壁溝の堆積層には遺構外からの流入土の混入がみられないこと、④に位置する焼土塊や炭化物が床面直上付近に堆積し、住居中央を囲むように壁際付近にみられること、⑤の堆積層に遺物が集中して出土するような状況が検出されなかったことである。

以上のことから、住居の火災状況と上屋構造の復元を考える。堆積層の特徴より、③の壁溝の堆積層の状況から本住居は火災まで倒壊していないため、遺構外からの流入土が入り込まない構造であったことが窺える。②の床面の被熱状況や④の焼土塊や炭化物の堆積状況より、本住居の火災はほぼ全焼であり、住居中央では完全燃焼、壁際付近では不完全燃焼であったことが推測できる。火災状況に踏まえ焼土と炭化物の在り方より、上屋構造は上部に草葺、下部に土葺（註１）がなされた竪穴住居であると想定できる（註２）。宮本長二郎氏の分類（宮本 2004）によると、二段伏屋式住居（挿図１）という住居形態であり、この住居形態の存続期間を弥生時代前期から古墳時代後期に位置づけていることから、本住居の構造として矛盾しないといえよう。

次に12号住居跡の使用から時間幅について考えていきたい。第２表は本住居の遺物の出土状況と上記の層分類との対応を示したものである。



挿図１　住居断面模式図（宮本2004一部改変）

No	住居共伴	出土位置	出土堆積層の状況	位置確定時期	層分類との対応
1	○	床面直上	火災時に落下した上屋構造の構築土	～火災直前	③
2	◎	床面直上、壁溝直上、貯蔵穴１直上	壁溝の９層、貯蔵穴１の５層	～廃棄直前	③
3	○	床面直上		～火災直前	③
4	○	床面直上		～火災直前	③
5	△	黒褐色土中	火災時に落下した上屋構造の構築土	～火災時	④
6	○	貯蔵穴１焼土層上位	上部は貯蔵穴１の３層、下部に焼土層	～火災直前	④
7	○	黒褐色土中、貯蔵穴１底面直上	焼土を含む黒褐色土、貯蔵穴１の５層	～火災直前	③⑤
9	◎	貯蔵穴２底面直上	貼り床の下の黒褐色系の土	～使用時	①
10	○	床面直上	火災時に落下した上屋構造の構築土	～火災直前	③
11	○	住居６層	火災時に落下した上屋構造の構築土	～火災直前	③

※◎・・ほぼ確実　○・・可能性高　△・・可能性低　※No.1・5・10・11の構築土、No.7の黒褐色土は床面直上である。
※No.7は再流入のため再流入の前後の位置を示した。

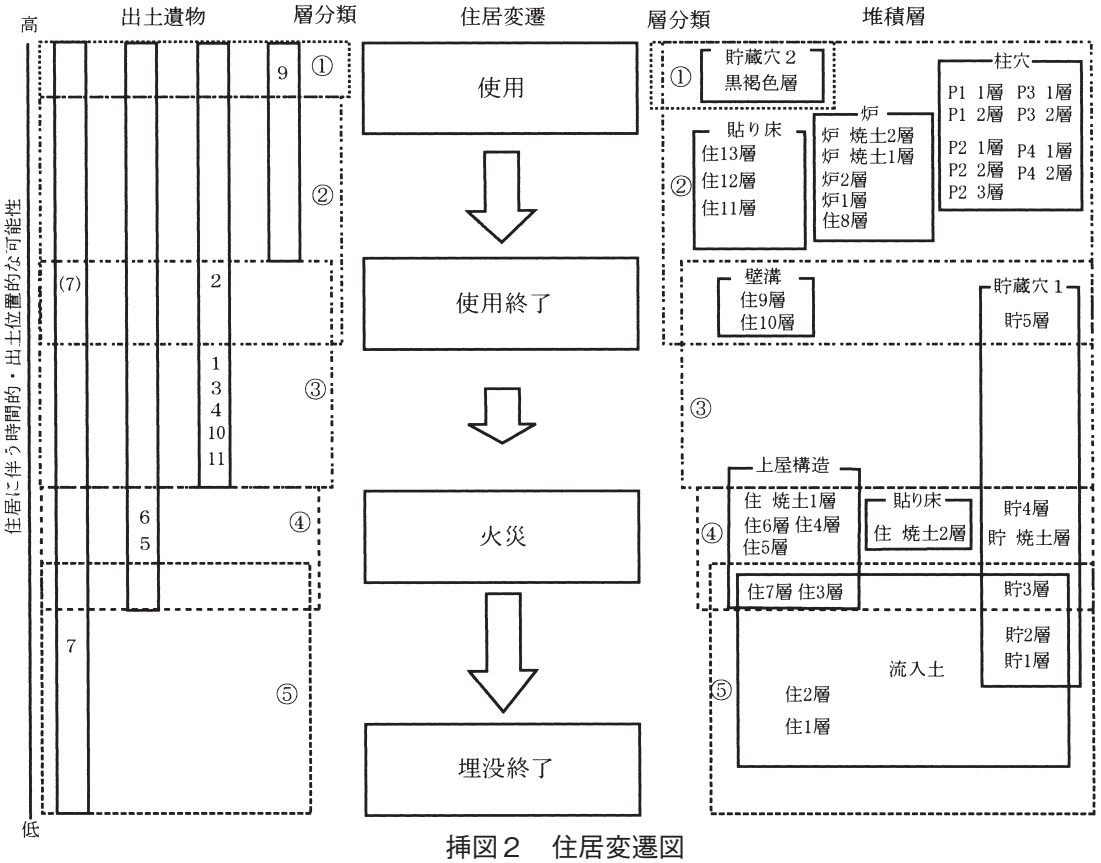
第２表　遺物出土状況

①の遺物は、本住居での生活時、またはそれ以前の時期と関わる可能性が高いと考えられ、それに値する時期を導く可能性が高い。②として明確に示せる遺物はないが、住居の最終的な使用時期示すことができる。③の遺物は住居使用時に使用されていた可能性は高いが、住居の使用が終了してから火災までの間に遺棄された可能性もある。④の遺物は住居火災時に混入した可能性が高い遺物であり、本住居に伴う可能性は低い。⑤の遺物は住居火災後に遺構外からの流入土に紛れた遺物であり、本住居に伴う可能性は極めて低い。また、出土遺物の時期については後に詳細な検討しており、それによると古墳時代前期後葉に値すると考えている。

では、これまで述べた本住居に関する覆土堆積状況、遺物出土状況、住居構造より、使用時から埋没完了までの時間幅を考えていきたい（挿図２）。遺物出土状況と覆土堆積状況より、本住居の上限年代を示す最終的な使用面以前の堆積層に位置する坩（9）と火災時の堆積層に位置する高坏脚部（5）の時期の差はなく、各々の出土層の時間的間隔は短いと考えられる。堆積層は①→②→③→④の過程でたどる。②の時間幅は不明であるが、③の時間幅は壁溝の堆積状況を考えると短時間であると想定できる。住居構造では、③の状況から上屋構造が壊れていないことや柱穴が４本のみであること、貼り床の貼り直しなど住居構造の作り直しの痕跡がみられないことより、建て直しの可能性が低いと考えられる。したがって、①－④までの時間幅を長時間として捉えることはできないとするのが妥当である。

つまり、12号住居跡は古墳時代前期後葉を上限とし、本住居の使用時から火災までの一連の過程は比較的短い時間であったと想定でき、住居使用終了後に時間を置かずに火災に至ったと考えられる。また、火災後の住居跡地の二次的使用痕跡は見られないことより、自然堆積による埋没であると考えられる。しかし、住居の掘り方の掘り込み面が不明であることより、時間幅の追求はできなかった。

（林　紘太郎）



挿図２　住居変遷図

註

(1) 土葺屋根の構造について、宮本氏は「垂木を地上面から桁や棟木に間隔狭く配り、垂木の間から土がもれ落ちないように茅や葦の束を垂木上に敷きつめ、土を覆う方法」と述べている。「草葺のように垂木上に木舞を配って縄で草を結える手間が省ける」ことより、長く存続し、広く普及したという（宮本2004）。

(2) 住居中央の被熱が著しいのは、上屋構造の上部は草葺であり、燃えている最中に床面に落下し中央部の床面で完全燃焼したためであろう。そのため焼土塊や炭化物がみられない。

参考・引用文献

宮本長二郎　2004「遺跡から推測する古代建築の形 (1) 住まいの形式」『建築士』　日本建築士連合会

高橋泰子　2002「焼失住居の一考察―竪穴建物の上部構造復元をめぐって―」『土壁』第６号　考古学を楽しむ会

石野博信　1990『日本原始・古代住居の研究』　吉川弘文館

12号住居跡出土の土器について

時期の検討　柱状脚高坏、小型坩が出土することから、比田井氏編年（註１）の古墳時代前期Ⅲ段階であると考えられる。この段階は小型器台・小型高坏・元屋敷系高坏が消失し、畿内系の柱状脚高坏、まれにＸ字形器台が出土しはじめる。前段階に波及した畿内系の小型坩も引き続き使用されている。

集落内での類例　ここでは、同一の集落である北西原遺跡と神明遺跡（註２）で検出された同時期（比田井編年Ⅲ段階）の住居跡出土土器と比較を行い、12号住居跡の集落内での位置付けについて考察する。

（１）高坏　12号住居跡の高坏は、柱状脚高坏と「八」の字状脚柱部を持つものの二種類に分類できる。

５（註３）は柱状脚高坏である。２も坏部のみの残存であるが、同種のものと考えられる。常名台集落から出土する柱状脚高坏の脚柱部は、中央部が若干膨らむ特徴を持つ。同様のものが、常名台集落のⅢ段階に